

胤富

親胤の亡きあとには、『千葉伝考記』に指摘されているとおり、昌胤の弟、胤富が千葉介になる(親胤の兄とあるのは誤りで、叔父にあたる)。すぐれた武将であったことは、一族諸臣の推挙の動きなどから充分に察知される。戦国時代末期における千葉介として、もっとも器量人であったと考えられている人物である。小笠原長和氏の研究「戦国末期における下総千葉氏」(『軍事史学』第五巻第四号所収)を参考にしながらのべてみたいと

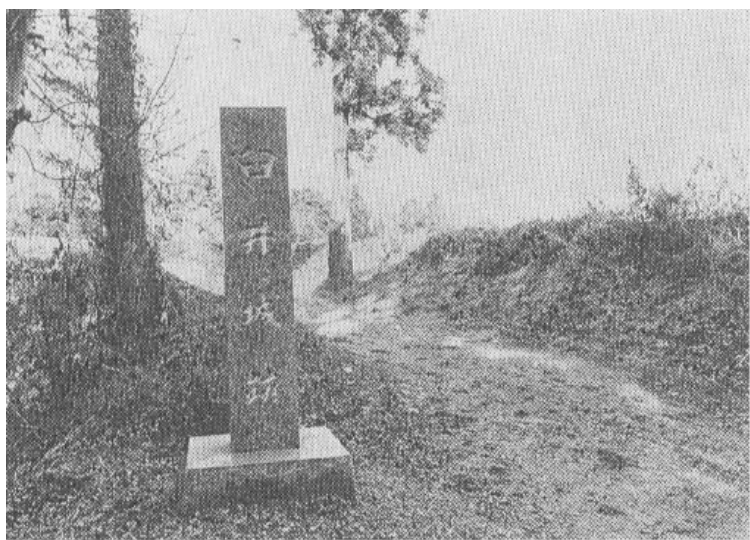
思う。

胤富は、大永七年（一五二七）正月十五日誕生、父昌胤の次男で、生母は、兄利胤と同母の金だ右衛門大夫正信の女である。父昌胤から領地を分与され、下総東部の森山城（小見川町岡飯田）に居城していた。この地に配されたことについては、郡境守衛のためといわれ、なおかつ、利根川下流域に繁衍する千葉氏の族縁にあたる海上・国分・粟飯原氏などの力に頼ることができたからであろうと考えられている。ちなみに粟飯原氏は、千葉介貞胤の弟氏光を祖とし、大戸庄を中心に、地盤を有していた。親胤の亡きあと、胤富は森山城から本佐倉城に移り、森山城には小見川城主の粟飯原胤次が入り、のち養子胤光にかわっている。なお、胤光は北条氏康の九男であるといわれている人物である。

弘治三年（一五五九）八月、胤富は、三〇歳で本佐倉城に移ったわけだが、この年の十月十五日に臼井城主である臼

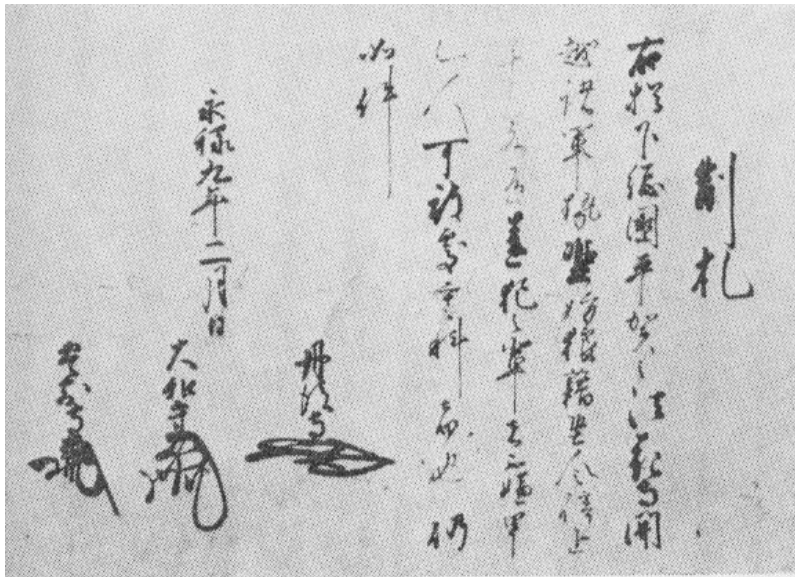
井景胤が没している。子の久胤は幼少であり、遺言によって小弓城の原胤貞が臼井城に入って久胤をたすけた。胤貞は小弓城と臼井城をかけ持ちにして、そのうちの三分の二を臼井城ですごしたといわれているが、やがて久胤にかわって実権を掌握し、また、千葉氏を凌ぐ勢力をたくわえるに至っている。

話はさかのぼるが、ちょうど親胤の時代、天文二十三年（一五五四）の春、北条氏康は甲斐の武田晴信、駿河の今川義元と和睦し、甲・駿・相の三国同盟が成立した。氏康にとっては恐るべき敵は、長尾景虎のみとなった。このような動きに対して里見義堯は、長尾景虎に接近し、房・越同盟を結んで相対峙した。永祿二年（一五五九）長尾景虎が上洛した隙をねらって武田・後北条は信濃や上野に軍進めたが、景虎帰国の報が入るや撤兵している。越えて、永祿三年（一五六〇）八月、後北条軍は、里見義堯の拠点である久留里城を包景虎の救援を要請した。九月、景虎は北関東に出陣して後北条方の諸城を落



4-17図 臼井城跡碑（佐倉市）

し、連戦連勝の勢いであつたので、この報告を受けた氏康は、遂に久留里城の囲みを解いて、武蔵の河越に軍を進めざるを得なかつた。このようにして危機を救われた里見は、これを好機に転じ、翌永禄四年（一五六一）には、正木大膳亮時茂に命じて、小弓城と臼井城を攻撃させている。ともに落城し、救援に馳せ参じた胤富軍は敗北し、本佐倉城に逃げかえるという始末に終わっている。なお、原胤貞がこれを取り返すことのできたのは、小弓城が永禄五年（一五六二）、臼井城が永禄七年（一五六四）のことであつた。正木時茂による小弓・臼井両城の攻撃の行われた年に、長尾景虎は鎌倉の鶴ヶ岡八幡宮において上杉管領家の名跡をつぎ、前管領上杉憲政の一字をもらつて景虎を政虎と改めた。



制札

右於下総国平賀之法花寺関
越諸軍勢濫妨狼藉堅令停止
畢若有違犯之輩者不嫌甲
乙人可被処重科者也 仍
如件

丹後守 (花押)
永禄九年二月日
大和守 (花押)
豊前守 (花押)

4-18 上杉輝虎（謙信）制札
（『松戸市史』史料編(四)本土寺史料より）

のち輝虎、入道して謙信を称したこと
は周知のところであろう。

北条氏政と里見義弘が雌雄をかけて
戦つた永禄七年（一五六四）正月の第二
次国府台の戦いは、里見方の敗北で終
わつた。後北条の房総への侵略が一段
とはげしくなり、里見は房総南部に次
第に追いつめられていった。このよう
な時、永禄八年（一五六五）七月、上杉
謙信は里見義弘に対して武蔵への出陣
を要請してきた。謙信は十一月、関東
に入り、年を越して二月に常陸の小田
城を攻撃している。攻め落としたあと
小胤貞の守る臼井城を包囲した。

胤富は兵を率いて臼井城に駆けつけ、胤貞をたすけた。胤貞・胤富はよく城を守り、上杉軍は堀一重をのこすまで攻めたて、落城寸前まで追い込んだが長陣の不利をさとりに遂に方位をといて引き揚げている。撤兵について、旧説では、臼井城包囲戦のさなか足利義秋（のちの一五代将軍足利義昭）の使者が、謙信に宛てた義秋と大覚寺門跡義信のそれぞれの書状をもって来陣し、謙信に、永禄八年（一五六五）五月十九日、松永久秀によって殺された将軍義輝のあとの、幕府復興の援助を求めたことを理由としていたが、近年、足利義氏が豊前山城守におくった書状がとりあげられ、これによつて意外な事実が判明した次第である。すなわち、三月二十五日の戦闘で、上杉軍は五〇〇〇余人の死傷者を出し、誇張があつたとしてもかなりの痛手を蒙つたことだけは、まぎれもない事実である。これがために兵站の問題も不如意となり、長陣は無益と考へた謙信が、撤退を指令したのであるといわれている。反面、千葉氏が臼井城を守り抜くことができたのは、胤富自身の救援が大いに功を奏し、自ら諸兵を指揮して戦闘を巧妙に展開したからであろう。その後、胤富は永禄十一年（一五六八）には、北条氏康の細則に依つて駿河に出陣し、武田信玄の攻撃をうけた今川氏真をたすけている。

天正二（一五七四）～五年（一五七七）にかけて後北条氏の攻撃は著しく、関やどの梁田氏がやぶれ、土気・東金の両酒井氏も完全に後北条の傘下に属し、上総北部から里見の勢力を駆逐した。この間、天正元年（一五七三）四月に武田信玄が、天正二年（一五七四）六月には里見義堯が、天正六年（一五七八）三月には上杉謙信が、同年五月には里見義弘がそれぞれ没している。これらの人々を追うようにして天正七年（一五七九）五月四日、胤富も五三歳の生涯をとじている。